

作成的理性と意義の肯定

科学・技術の時代における宗教の未来に向けて――

K・リーゼンファー

世俗的な世界把握と人生の宗教的な理解との関係は、自然科学・技術に影響された現代の生活世界において、宗教と科学とのイデオロギー的諸対立が緩和されると同時に、分裂が深まっている新しい段階へと入ってきたように思われる。近代初頭の地球中心の世界像に関する論争の中で、人間は、空間的に新たな位置に定められ、また、一九世紀における進化論をめぐる危機の中で、人間の時間的位置づけは新たに定められた。それに対して、自然科学・技術による生活世界の変革は、宗教的な了解をも可能にする人間の根源的な思考形態に多大な影響を及ぼしている。急速な進歩にともない、科学的認識の内容をその世界観の重要性に関して評価するのは困難であるが、科学・技術的思考方法そのものが、現実了解の他の方法に対してその説得力を失わせるほどの優勢を持っている。この精神的状況を説明するために、まず、自然科

学・技術的思考形態の構造と傾向を分析することが必要である。

一 自然科学・技術的思考形態の問題

(1) 自然科学・技術的思考形態の基本的特徴

自然科学的認識は、客観を、生活連関から引き離すと同時に、存在者および包括的な意味連関におけるその位置から解き離し、個別化・対象化することによってそれを規定する。その際に、客観は理論化されており、また主観との関係に依存しない純粹に量的な観点のもとで合理的に主題化されることが可能となる。それにともなつて、客観は没価値的、また測定可能となり、したがつて、数学的・計数的に把握可能なものとして現れる。そのために客観は、その個性を失い、したがつて普遍的法則の下に包摂されるようになる。このような仕方であつた客観は、主観の知

的関心に答えるために、実験において扱われている。実験の結果が確實であるためには、実験は任意に反復可能でなければならぬので、客観は代替可能なものとみなされる。したがって、客観は、客観自体の内に意味があるとみなされるのではなくて、任意に変わりうる実験者とその依頼者の関心に対して、機能的に役立つだけである。それゆえに、主観としての人間によって操作された存在者は、いかなる尊厳も歴史的な意義も持たない。なぜならば、歴史というものは出来事の反復不可能性と、人間に対する意義の要請を含むからである。したがって、ヴィーコ(Vico, 1668-1744)の言「まわし、真なるものは作り出されたものに等し」(verum ipsum factum)にあるように、真理と意義とは、実験者によって計画され、前もって起案される限りにおいてのみ認められ、認識過程へと受け入れられるのである。この方法は、実験する主観に対して、客観を統制可能、また実験の成果を作成可能なものとして保証するので、未来は技術的な観点の下で計画可能・予知可能であるように見える。それゆえに、時間の経過は——本来的な歴史の意義における——人間に意のままにならない意義をもたらしたり、あるいは取り去ったりするのではない。むしろ、時間の中では、発見・発明の時点、すなわち、そのつどの新しいもの、人間に意のままに処理されるようなものだけが強調される。このために、歴史は、人間のより高度の自律と自己充足に向かっていく、永続的な進歩であるように見える。

科学的な研究は、その専門性の向上のために、研究の細分化を必要とするのだから、個々の研究者は、現実に関する全体的な見地を断念する。むしろ研究者は、研究成果の評価と適用を、営利的な組織に任せる。そうすることによって、経済組織などの機関は、技術的情報の利用によって広範囲にまで及び、全世界的な威力を持つようになる。それにともない、自然科学・技術的認識は、経済的利益と結びついて、工業生産と全世界的な市場化を促進し、すなわち経済的利益優先の下に、グローバルゼーションを促す。技術的・経済的に作成しうるものが進歩的で、またより善いものとみなされているのならば、あるものが進歩的で技術の最先端にあるほど、そのものの技術的・経済的実現・制作は、意義深いもの、また正当なものとみなされがちである。そのような思考形態の目標たる地平は、人間と関わるあらゆる自然の経過を統制し、その結果として、あらゆる世界内部の存在者を道具として利用することによって、安全な現代と将来を形成することを目指す。

(2) 思考形態に対して科学・技術の及ぼす影響

現代の科学・技術にあるように、ある社会的現象が、實際生活を幅広く規定するときに、その思考形態が、一般的な考え方に決定的な作用を及ぼすことが予想される。

自然科学・技術的方法が、物質的対象に高度に適合しているのだから、その方法には、人間の理解を物質的存在へと限定し、それを唯一規範的であるかのように表面に出す傾向がある。すなわ

ち、人間にとって、何が現実であり真と善であるかは根本問題であり、また、現実全体、その根拠と目標の探求は、人間自身の意義の探求と同様に人間にとって自然なものである。これらの問題が、科学・技術的方法によって規制された思考の地平におかれる場合、それらの問題は縮小され、一面化されて、不十分な視点の下で考察される可能性がある。つまりその場合、存在者が「現実的」とみなされるのは、存在者が対象化可能であり、経験的に確認でき、数量化可能、測定可能、定式化可能、計画可能である限りにおいてであり、言いかえれば、存在者が人間の合理的・技術的な支配力へと調整される限りにおいてである。しかし、そのように構想された存在者は代替可能であり、それ自体における意義を持たず、また自身のうちに価値を持たない。それゆえに、このような存在理解において、存在者自体の本質と意義への問いが妨げられると同様に、ここで主観がただ合理的・技術的能力の持ち主として考察される限り、人間に対する理解も未発展のままに留まる。このように、人間に先だって存在しその意のままにならず、人間へと関わりと同時に、企図する人間の我意から逃れるような現実に対する了解が隠蔽される。一回限りの尊厳と全体の秩序、歴史的な出来事、相対化不可能な超越、規範的な意義による呼びかけ、また尊厳をうながす人格性は、この了解地平において不明瞭となる。これらのものは、単なる偶然的事実とみなされ、その評価は美的情念や個人的な嗜好として議論から排除されて、換言

すれば、標準的な現実理解からは除外されるのである。

この見地において「真」とは、もはや存在者に具わる隠れた本質、あるいは人間の責任を呼び起こす出来事の意義ではなく、悟性によって構成されるものとなる。その際に、この構成が、認識的あとづけであるか、あるいは計画的な構想であるのかを識別することは、ほとんど不可能である。しかし、合理的に作成しうるもののみが、理解可能であり、真として認められる場合には、真理はもはや人間の思考によるところの所産にすぎない。

そのような思考は、いかなる意義をも受け入れることはできないのだから、結局「善」に関する思考を、有益なものおよび享受可能なものに制限する。それゆえに、「善」とは、人間の期待と欲求に応じて役目を果たすもの、結局のところあらゆる存在者を人間の望みに対応させる、技術の進歩そのものに他ならない。それとともに、いかなる規範も任意に定められたものとして主観化され、あるいは単なる社会的な取り決めとして相対化される。

人間がその尊厳を守り自己目的性を発展させる姿勢は、現実全体をその一致した根拠と最終的な意義に関して考慮することに基づく。そのような根拠と意義に関する問いと探求が始めから非現実的なものとして除外される場合には、認識された意義に基づいた自己実現に通じる経路は、閉ざされてしまっている。しかしこのようにして、例えば信頼、愛あるいは幸福のような、人間の根源的な経験と態度は、無反省のままに留まり、また人間は別離、

苦惱、罪責あるいは死という不可避の限界状況を抑圧しているのだから、成熟するための重要な機会を失っている。それだから人間は、唯一の現実として承認された、世界内部の対象をあたかも反射鏡とし、そのうちに自らを把握しようとする。そうするとともに対象へと方向づけられた科学・技術的思考は、無防備になった人間自身に跳ね返ってくる。そのとき人間は、——正当な仕方——自らのある部分において個別科学的な研究の対象とされるのみでなく、その全体性において経験的・合理的分析と技術的な計画・作成の対象とされる。このことによって、人間は、そのつどの一回限りで、意のままにならない、自己責任を有する主観としての尊厳を損ない、あらゆる機能性を凌駕する実存的発展可能性を失う。

技術的思考が絶対化される場合に生じるこのような結果は、主だった傾向性にすぎないのであって、不可避の存在史のようなものではない。それにもかかわらず、現代における自己実現の可能性を、人生の根本的な意義づけの地平において考察する際、この了解地平に含まれた問題を考慮に入れなければならない。

二 宗教的次元の解明としての意義了解

(1) 科学・技術的合理性の受け入れ

科学・技術的合理性と、人間全体の自己実現、宗教的に言えば、救済の問題との隔絶を調停するために、何よりもまず必要なのは、

宗教の側では合理的な説明および納得のゆく基礎づけに対する現代人の要求を、真剣に受けとめることであろう。それゆえに、宗教的な発言に当然期待されることは、宗教的メッセージが、聞き手の了解地平と結びついたかたちで、その内容を放棄したり隠蔽したりすることなく、理性的に基礎づけられて概念的に明瞭に伝えられることである。逆に、科学・技術的思考形態は、人間にとってのその意義に関して解明される必要がある。しかしその際に、科学・技術的思考形態を、ただその所産だけのゆえに評価して、それ自体としては意義の虚しいものとして、あるいは一時的な時代現象として片付けることが不十分である。むしろ、そのような思考を、人間全体と関わる精神的な活動として、その意義のうち認め、人間の自己形成の中へと肯定的に統合することが課題となる。そうすると、科学・技術的思考は、人間の自己実現全体の中で重要な位置を占めるので人間の根本能力の一つとして——アリストテレスとトマス・アクィナスが言うところの自然本性的な慣習 (*habitus*) として——肯定されるであろう。

(2) 意義への問い

科学・技術の発展は、自律的でも自己目的的でもなく、人間全体の意義の実現との関係において、その目的をもち、ゆえにその発展の方向が人間の福利を中心に、重大な責任をもって規定されなければならない。同時に「救済」という宗教のテーマは人間の救済であるので、宗教的発言は、哲学的・人間論的な了解地平を

通して伝えられる必要がある。このように人間そのものの意義と自己実現への問いを共通の焦点にすれば、技術的合理性と人間存在の宗教的解釈とは、対話ができるようになるだろう。ここでは、宗教性の人間論的基礎づけの若干の根本的特色を示したい。

人間は、本能の欠乏のゆえに技術的手段を必要とするが、本能が欠乏する原因は理性の能力のうちにある。なぜならば、包括的な目標の認識と、多様な行動の可能性の認識によって、理性は、本能による諸行動の必然的な結合を解消させるからである。同じ理性が、本能の欠損を、目標へ向かう技術的行動と、技術的制約の根拠である因果関係の認識とによって補い、克服する。つまり理性は、人間がそれに応じて世界への関わりと自分自身を規定する意義と目標の認識によって、人間そのものの行動能力を獲得させる。したがって、人間には理性が具わるから、人間がそこから自己自身——自分の意義と行動可能性——を認識し規定できる目標を追求する。すなわち、人間は、そこから自己自身を主体として実現できる目標を探索するので、自由の自己規定は、それ自体のためまたそれ自体において善いものと肯定される目標から得られる。このように、人間は、自分自身のうちに、また自分のために意義そのもの、すなわち、自体的な善を実現することのできる存在であり、したがって、それ自体によって成り立つ意義ないし無制約的な善を受け入れることができる主体である。人間の無制約的な尊厳はこのことに基礎づけられており、さらに、この尊厳

は個人そのものに具わる。なぜならば、意義への洞察と意義そのものの自由な実現は、自然のままの人間の一般的本性によって行われるのではなく、ただそのつどの個人によるものであり、つまり、人格にしかできないからである。あらゆる倫理と人権は、個人のこの無制約的な尊厳に基づいている。このために、人間を単なる客体、あるいは手段としてのみ取り扱おうとするあらゆる試みは、人間がその精神的な性質において本質的に関与している、無制約的な善ないし意義そのものに背いている。そのうえ、他者が行為者と同じ本質を有するので、他者を手段とし、あるいは他者を客体のように扱う操作は、行為者が自分自身を有意義な目標連関から閉め出し、つまり、自身の有意義性を破壊させることになる。

意義の実現は、人間の自由意志によるにもかかわらず、有意義性そのものは、人間の意向に依存するものではない。有意義性は、人間によって構成されるのではなく、認識において受け入れられるものであるから、意義そのものは人間の自由な行いを可能にするものとして、それに先行している。それゆえに、意義そのものは、人間によって制約されるのではなく、それ自体から自らを意義と善として顕にするものである。まさにこの独立した無制約性において、意義そのものは、有意義な自己規定の能力を持った人間存在を尊厳あるものとして構成する。したがって、人間は善への関与においてのみ、すなわち、それ自体において認められる善

よってのみ、自己自身を実現できる。そのために、宗教的に「救済」と呼ばれるものは、さしあたり、善そのものによる、人間存在の維持と完遂として理解される。しかし、善ないし意義を自由に肯定することは、自ずから無制約的な有意義性の源として明らかとなる善の認識を含むので、この善への関わりは、悟性の構成に依拠しない真理の承認を含意している。

だが、人間が自身を完成することは、ただ真理への関わりにおいて知るもの、また善への関わりにおいて自らを規定するものである限りにおいてのみ可能であることを、人間は知っている。それゆえに、真なる自己ないし善なる自己に対する——あるいは救済に対する——問いは、無制約的な真と善とに関する問いへと移行してゆく。この根本的な意義への問いの中で、単に事実的なもの、制作可能なもの、あるいは機能的にすぎないものの次元は、無制約的に超えられ、単なる部分的な契機として根本的な意義への問いの中へ揚棄される。そのため、あらゆる自由な行為によって前提され、避けられない自己の意義についての問いこそ人間を、単なる事実性、機能性、客観化可能性、また恣意から救い出すのである。なぜならば意義そのものは、恣意的に定立せられえないのだから、同様に、意義の自由な実現も、外部から他者によって遂行せられえないからである。このように、代替不可能で無制約的な、つまり無制約的善に基礎づけられた個々の人間の自己自身における有意義性は、初めて人間存在に具わる諸々の次元に——

その科学・技術的能力にも——その課題と有意義な人間存在に対する可能な貢献としての意味を付与する。

(3) 救済の探求

人間の理解は本来、現実と意義とを無制約的な決断性をもって肯定しようとするのだから、理性は無制約的な肯定に値し、またその肯定を担うことのできるかの現実とかの意義、つまり、無制約的な現実と無制約的な意義とを探求する。しかしそうすることによって、理性は宗教的な領域へ突き進む。人間の自己実現に対する問いは、無制約的な意義と、偶然的でない存在、つまり超越に向かうことによって、厳密に宗教的な救いへの問いという意味を獲得する。というのは、無制約者に直面して人間の努力が極度まで要求され、同時に人間はその限界を感じざるをえないからである。つまり、無制約的、ゆえに無限な意義を相応に実現すること、ないし能動的に無制約者に対応することは、人間の自然な能力を凌駕しているのだから、人間は自発性の能動的力をより深い受容性へと展開することによってのみ、無制約者に関与することができる。それゆえに、人間は、無制約的な意義と存在に向かつて、隠しだてのない拝受、聞き知る傾聴、自己自身を相対化する謙遜、祈りと恭順、期待に満ちた希望のような態度へと歩み入る。人間が、自身の根源的な精神状態に対して注意深い誠実さを持つなら、自身の恒常的状況が苦悩、罪責、死によって特徴づけられていることに気づく。この人生の限界を受け入れて、それにも

かわらず、人間としての自身の尊厳と責務を放棄しない場合、宗教的な諸態度は、狭義における救済の探求へと深まる。なぜならば、人間は、この限界から自身を解放することはできず、本質的に——個人的な弱さのゆえではなく——無制約者による救いの手助けを必要とするからである。超越が手助けするという前提によって、あるいはそのような助力に信頼を抱くことよってのみ、人間は絶望のうちに破滅することなく、自身の限界を受け入れることができる。しかし、そのような救済に対する待望からより明確な自己超越の可能性、つまり憐れみ深い善良なものとして認められる無制約者へ向かう可能性が人間に開けてくる。そのとき、無制約者によって把握され完成されるものとして、自己自身をより深く把握し実現する可能性が人間に与えられている。

救済への問いは、単なる科学技術的思考方法だけには閉ざされている、人間存在の本質的な可能性へと入る道を指示する。人間存在の完成や救済への問いの優位の下に、意義の理解は上位の認識方法として示される。しかし、意義は常に同じように定立可能な事実ないし経験の所与ではなく、要求しえない賜物である。それゆえに、非必然的な出来事と歴史の意味、超越関係における対人格の相互関係、観想的思慮と祈り、象徴と伝統に対して理解は働く。これにともなつて、信頼と希望、慈悲、責任と許し、連帯性と自己超越のような人間にふさわしい態度は根拠づけられる。

三 意義肯定の修得

技術的な文明には、精神的伝統を断絶し、価値意識を零落させる傾向があるので、人間的価値の理解と意義の経験を得られる方法が求められている。

近代の人間が、科学技術の合理性の明るみの下で現実を理解する限り、人間は、人生の根本問題および宗教的次元へ接近するにあたって証明を要求することまではいかににしても、合理的な洞察による反省的な確証を探し求める。それゆえに、科学的合理性と非合理的と思われる信仰の間にある意識の分裂を克服して、人生の意義と個人の尊厳、自由と責任、人権と倫理的義務、無制約性と超越のような信念を、納得のゆくように基礎づけることは、現代において優先的な課題である。人間存在の意義の基礎づけとその意義の根拠の解明は、哲学的理性をその理論の深みと実践の広がりにおいて刷新することを必要とする。哲学の教育は、単なる歴史的知識だけを教えるよりも、学習者の内に、理論的、実践的、宗教的な根本問題を自身で洞察する能力を育てなければならぬ。

それに加えてさらに人間は、無制約的善のような非対象的な根本現実に向かって自らを開くために、哲学的認識を超えて、価値と意義、超越との関係に対する経験を含んだ理解を求める。精神統一と読書、瞑想と祝典の内には、人間存在の深い次元を教示し、

呼び起こす力が潜んでいる。良心や言葉にならない思慮の中で、善によって呼びかけられていることを人間は知っており、宗教的な言葉を聞くことを通じて、人間が自らの核心を再発見すること、また信頼をもって人生を有意義なものとして受け入れることが可能となる。瞑想を通して真の自己に近づき、根源的存在の経験的理解および超越との遭遇への手引きを与えることによって、伝統的な諸宗教は、現代の問題に対してかけがえのない寄与をなすことができる。

最後に、能動的な自己超越は、日常的でまた隠された仕方では、他者との信頼関係の中で、最も深く実現される。なぜならば、他者ほど具体的でありながら、計り知れない深さを持つものはないからである。献身的な愛によるそのような遭遇は、人間同士の間立関係における表面性と硬化とに打ち克つのであるから、他者において、人間の尊敬、意義、貴重さを、直接に経験しうる。真剣に打ち込まれた愛は、理論的洞察や瞑想的理解にもまして、人間存在の本質の核心を探る。他者——社会の進歩によって放置された者、病人、障害者——に対する自発的な奉仕は、私欲のない愛を呼び起こす。また、こうした奉仕は、滅私的な援助の実行によって、自発的な献身の正しさと有意義性を確信させると同時に、このような行為における無制約的善の現存を意識へともたらしめることができる。人間として成熟できるためのそのような奉仕の機会、つまり福祉的活動の場が現代の状況の下で、人間性を実行

することを学ぶために必要とされるので、それを多様なかたちで提供することによって、一面的な進歩のただ中で人生の目標を見失いがちな現代人に対して、他者関係と自己発展を学ぶ貴重な可能性が開かれるだろう。

(小島優子訳)

(Klaus Riesenhuber, 哲学・思想史、上智大学教授)